

ゴットフリートの「トリスタン」における ブランゲーネの役割をめぐって

小 澤 昭 夫

序

トリスタンとイゾルデ、と言う時最初に思い浮かべるのは、恐らく愛と死、ということであろう。トリスタンの両親の愛と死に始まり、トリスタンとイゾルデの愛と別離——そして恐らくは中絶後の部分が描く筈の死——まで、ゴットフリートの「トリスタン」に描かれているのは、もっぱら愛の姿である。

トリスタンとイゾルデの愛、マルケ王の宮廷におけるそれが、姦通の上に成り立っていることは紛れもない事実である。それ故二人の愛の前には、イゾルデにとっては夫、トリスタンにとっては伯父であるマルケ王が立ちはだかるのは当然である。このマルケ王が宮廷社会の代表者であるとすれば、イゾルデの忠実な侍女にして二人の腹心の友でもあるブランゲーネは、恋人達とマルケ王との丁度中間に位置しており、宮廷社会における恋人達のきわどい立場を支えているようにみえるのである。

ゴットフリートはプロローグ (131行以下) で、トリスタンについて物語った多くの人々の中でもアングロ・ノルマンのトマ Thomas を高く評価し、このトマの物語を自分が「トリスタン」を語るにあたっての手本とする旨、明言している。

しかしゴットフリートは、ブランゲーネの役割を原拠に比べて著しく広げ深めたのである¹⁾。Ehrismann によれば、ゴットフリートは登場人物、とくにブランゲーネとマルケにより気高い精神と態度とを与えたのである²⁾。

着目したいのは、原拠に対してゴットフリートがブランゲーネという人物像に加えたこの変更である。小論の意図するところは、ブランゲーネに対してゴットフリートが加えた変更³⁾に注目しつつ、物語における彼女の行動と役割を考察し、この変更の意味を探ることである。

1

物語の筋の進行という点でブランゲーネが大きく関与するのは、まず媚薬をめぐるエピソードである。王妃イゾルデは、娘イゾルデの嫁入りの旅に同行するようブランゲーネに頼み、媚薬を託して厳重に保管するよう命ずる。しかし彼女は王妃から命ぜられたこの役目を果たすることができない。彼女の不在中に、侍女の一人がぶどう酒と間違えて媚薬をトリスタンとイゾルデに飲ませてしまうからである。

重要なのは、それに続く彼女の行動である。戻って来て半ば空になった媚薬の瓶を見、事の重大さと自ら負うべき責任とを自覚した時、媚薬の残りを海中に捨て去るのである。

ここで媚薬の性質を振り返ってみると、王妃がイゾルデの旅立ちに備えてそれを調製した時、次のように言われている。

11439 mit sweme sin ieman getranc,
den muoser ane sinen danc
vor allen dingen meinen
und er da wider in einen :
in was ein tot unde ein leben,
ein triure, ein vrōude samet gegeben.

「もしある者が誰かと一緒にこれを飲めば、心ならずも相手を何物にもまして愛さずにはいられず、相手の方もまた彼一人だけを愛するようになるのであった。この二人には、ひとつの死とひとつの生、ひとつの悲しみとひとつの喜びが共通のものとして与えられるのであった」
今ブランゲーネが媚薬の残りを捨てるので、この媚薬によってもたらされる愛の運命共同体から、マルケは完全に除外されてしまうのである。ゴットフリート自身が、後にイゾルデとマルケの婚礼の夜に、媚薬を既にブランゲーネが捨てたことを強調している（12651ff.）が、Saga でも Sir Tristrem でも（そして恐らくはそれらの原拠であるトマの作でも）媚薬の残りは保存されており、それをマルケが飲むことになっているのである⁴⁾。

王妃から委ねられた媚薬の監視を怠ることによって（もちろん不注意に過ぎないのだが）、ブランゲーネはトリスタンとイゾルデを決定的に結び付け、一方媚薬の残りを捨て去ることによって、二人の愛にマルケが入り込む余地を完全に無くしたと言えよう。

こうなるためにはしかし前提が必要なのである。トリスタンがモーロルトを一騎討で倒して以来、コーンウォールとアイルランドの両国は敵対関係にあり、コーンウォールからアイルランドを訪れる者を待ち受けているのは、男であれ女であれ身代金をもってしても免れられない死であった（7204-22）。その上、イゾルデ母子は、肉親モーロルトのかたきトリスタンへの復讐を誓っていたのである。イゾルデとマルケの結婚、あるいはむしろトリスタンとイゾルデの愛を、そもそも不可能に思わせる程、これは大きな障害である。この障害を解消するのが、トリスタンとアイルランド王家の和解であり、両国の和平である。

ブランゲーネの登場の時機を早めた（9317行）こともゴットフリートが原拠に対して加えた変更のひとつであり、Saga と Sir Tristrem では、彼女が初めて登場するのは、やっと媚薬のエピソードに入ってからである⁵⁾。媚薬のエピソード以前のブランゲーネの役割で重要なのは、タントリスの真の素姓（トリスタン即ちモーロルトのかたき）が露見して後、このトリスタンの処置をめぐる彼の運命を決する相談に加わることであり、そこで王妃から助言を求められ、主導権を与えられることである。

ここでは二人のイゾルデがトリスタンをモーロルトのかたきとのみ見て、復讐の義務感に囚わ

れている一方、ブランゲーネは何よりも現状に目を向けさせ、内膳頭 *truhsaeze* の欺瞞に対する証人たるトリスタンその人と、待ち受けている危険を承知の上で、しかも今回は致命傷を負った訳でもないのにアイルランドを訪れた彼の意図とを、活用させようとするのである。結局もっぱら彼女の助言と勧めによって、トリスタンとアイルランド王家の和解は成立する。この和解によって、両国間の冷戦状態は解消され、「龍を退治する者がいて、それが身分高貴にして騎士ならば」(8911) 花嫁として与えられることになっていたイゾルデは、マルケの求婚の名代たるトリスタンの手に委ねられることになる。この和解こそが後のすべての出来事の大前提であり、これによってブランゲーネの運命もまた、トリスタンとイゾルデのそれに密接に結び付けられるのである。ゴットフリートがブランゲーネの登場を原拠よりも早めたのは、アイルハルトの作の影響だろうとのことであるが⁶⁾、ベディエが編集した「トリスタン・イズー物語」⁷⁾の該当箇所（この部分をアイルハルトに従って取り扱っている）を見る限りでは、彼女は和解の成立に何ら関与していない。

トリスタンとイゾルデが愛の告白をした後では、恋の思いを遂げようとするのは極めて自然な成行である。満たされぬ思い故に二人は食も取らず、見るまに衰弱し、生命の危険すら生じてくるが、ここではブランゲーネは二人にとって邪魔な存在であり、「愛の敵」*der Minnen viendinne* (12198) であり、「いとわしい見張り」*die leiden huote* (12196) である。愛のために死にそうなのに思いが遂げられないのは、ブランゲーネが邪魔するからだ、トリスタンは責めるのである。

12115 und sicherliche: sterben wir,
dast nieman schuldic an wan ir:
unser tot und unser leben
diu sint in iuwer hant gegeben.

「本当に、もしわれわれが死ねば、それはただそなた一人の責任だ。われわれの生死はそなたの手に委ねられている」

これを聞いたブランゲーネは、二人を死なすよりは生かそうとするのである。

12134 e ich iuch laze sterben,
ich wil iu guote state e lan
swes ir wellet ane gan.

「あなた方を死なすよりは、むしろ良い機会を与えてあげましょう。たとえあなた方が何を始めようと」

Tax は、「もしブランゲーネが肉体的な愛の成就の機会を与えなければ、トリスタンとイゾルデはここでもう満たされない愛ゆえの死を遂げたであろう」⁸⁾と述べている。その直後に彼はしかし「トリスタンとイゾルデの愛の行路はやっと始まったばかりである」⁹⁾と、事実上前言を取り消すことでもあり、このような仮定がそもそも適当かどうかわからないのだが、少なくともここでブランゲーネの果たす大きな役割は認めている訳である。

イゾルデに随行するようにとの王妃の要請に応じて、イゾルデの「名誉とすべての事」*ir ere und al ir dinc* (11478) を力の及ぶ限り守るとブランゲーネは誓ったのである。しかし「不注意から」*von miner warlosekeit* (12472) イゾルデに、逆に「恥と悩み」*laster unde leit* (12471) をもたらした彼女は、自分がすべての不幸の原因となったことを、はっきりと認識している。

14406 Isot owe! Tristan owe!
daz ich iuch mit ougen ie gesach
und allez iuwer ungemach
von mir uf erstanden ist!

「可哀そうなイゾルデさま、トリスタンさま。あなた方にお目にかかったことが恨めしい。あなた方の不幸のすべてが、このわたしのせいで起ったとは」

それ故、媚薬以後の彼女の行為は、ひたすらこの過失を償うことに向けられ、恋人達への奉仕に全力を傾けるのである。

14450 herre, diu selbe kurze vrist
die ich noch ze lebene han,
diu sol mit iu zwein hine gan,
daz ich iu beiden gelebe
und iu ze lebene rat gebebe.

「あなた、私がこの先まだ生きねばならない短い時を、お二人に捧げましょう。あなた方のために生きて、お二人が生きて行くのに助言をするために」

恋人達を援助しようとのこの決意を、彼女が実際に示すのは、イゾルデとマルケの婚礼の夜のことである。イゾルデの「処女でないこと」*wipheit* (12425) をマルケに隠すことが、恋人達にとって最初にして最大の難関である。窮余の一策としてイゾルデが考えついたのは、ブランゲーネを身代りとしてマルケと一緒に床入りさせることである。というのも「彼女が美しくもあり乙女でもあったから」*wan si was schoene und was ouch maget* (12446) である。この屈辱的な役目をすらブランゲーネは引き受け、無事に果し、恋人達の秘密は隠され危機は避けられる。

しかしこの身代りによって、ブランゲーネは同時に、イゾルデの有罪を証明し得る危険な生証文ともなった訳であり、その結果がブランゲーネを亡き者にしようとするイゾルデの試みである。こんなイゾルデにしかし殺害の試みを悔ませ、改心を促すのは、殺害を受け請った小姓達の口から伝えられたブランゲーネの言葉であり、陰謀の張本人イゾルデへの批難も恨みもなく死を甘受しようとする態度である (12840-48)。

Jackson は、トリスタン物語の中にある古くて粗野な多くの要素が、トマとゴットフリートによって除去されたにもかかわらず、このエピソードが存在を許されていることに驚きの念を抱いている。彼によれば、ゴットフリートがブランゲーネの身分を引き上げ、全体としてこの叙事詩の道徳性を高めたことで、このような好ましからぬエピソードは消えることが期待されるのだという。Jackson は、物語の筋を二つの異なった次元、すなわち「物語としての筋にとっての意味

と象徴的な意味との、二つの異なった面から」¹⁰⁾理解できると主張するのだが、ここに彼はこの二つの次元からの解釈を適用している。それによれば、narrative level では、イゾルデが証人を殺そうと決意し、犠牲者の誠実の証拠を見て後悔する。一方 symbolic level では、宮廷風恋愛(courtly love)との妥協は決してするまいとのイゾルデの決断が、思い直してこの妥協が有利な道であるようにみえる時、鈍るというのである¹¹⁾。Jackson が symbolic level においてみられるというイゾルデの決断とは、つまり姦通との訣別ということなのだが、それをテキストから読み取ることはできない。

イゾルデが考えることはただ、ブランゲーネを亡き者にすればもはや「自分の名誉のことで」
umbe ir ere (12701) 心配する必要はない、ということであり、これによって彼女は

12711 daz man laster unde spot

mere vürhtet danne got :

「ひとは恥と嘲笑とを神よりももっと恐れるということ」

を明らかにしたのである。

この殺害計画は、逆にブランゲーネが「忠実で心変わりせず」getriuwe und staete (12937)「金のように純粹」geliutert alse ein golt (12941)であることを証明することとなる。一方、トリスタン物語の諸改作においては召使同然であり、トマの作においてすら僅かしか改善されていないブランゲーネの身分¹²⁾を、結局のところ「ブランゲーネが王家とどのような親類であるのか、わからない」¹³⁾にし、イゾルデの近親者¹⁴⁾という地位にまでゴットフリートが引き上げたことによって、それだけイゾルデの深刻さと残酷さは強調されるというものである。

イゾルデとブランゲーネが、心の底から信頼し合うようになるのは、これを境にしてのことである。これ以後、恋人達の秘密を守ることにブランゲーネが積極的に関わるのは、この無条件の誠実さがあってのことである。

この後、恋人達の密通がマリョドーの知るところとなって、物語は新たな進展を見せるが、その原因もまたブランゲーネの不注意に帰せられる。深夜逢瀬を楽しみに出かけたトリスタンが婦人部屋に入った後で、彼女は戸を締めるのを忘れるのである。雪の上についたトリスタンの足跡を辿ったマリョドーは、その戸を通して入り、二人の密会を確認するのである。ここでゴットフリートは、わざわざ次のように言っている。

13508 nun weiz ich, wie si des vergaz,

daz si die tür offen lie

und si wider slafen gie.

「どうして彼女が忘れたのか私は知らないが、彼女は戸を開けたまま、再び眠りに就いたのである」

後にメロートが、密会に出かけるトリスタンを偶然発見する時にも、詩人は「どうしてだか知らないが」ine weiz wie (14510) という一文を挟んでいるところを見ると、ゴットフリートがここでブランゲーネをして筋を進展させる契機としていることは明らかである。

恋人達の秘密を知ったマリョドーは、「彼の結婚生活と名誉にかかわる」 an sin e und an sin ere (13648) よからぬ噂が立っているとマルケに告げ、二人への疑惑を起させるのである。そしてこれが「劇的要素」¹⁵⁾であるとされる huote、すなわち「夫が妻の不貞を防ぐために行う監視」¹⁶⁾の本格的な始まりである。これ以前の二人は、見張りを恐れる必要もなく当然それに苦しめられることもなかったのであり、二人の生活については次のようにいわれていたのである。

13079 sin haeten dannoch beide
dekeine herzeleide
noch niht solher ungeschicht,
diu hin in daz herze siht.

「彼ら二人にはまだ何の心痛もなく、胸にこたえるあの不幸もなかった」
これ以後はしかし恋人達はマルケの疑念故に「心痛」を知るのであり、マルケとマリョドーの二人に更にメロートが加担するに及んで、絶えざる疑惑と監視の下で恋人達の苦しみは募るのである。

2

「欺瞞と誠実とが恋人達の行動を支配している」¹⁷⁾とは Ehrismann の言葉である。マルケの宮廷におけるトリスタンとイゾルデの行動は、まさにこの言葉に言い尽されているともいえよう。しかしこれもまた当然のことである。

ここでコーンウォールへの上陸を目前に控えたトリスタンの心中を振り返ってみると、そこに見られるのは「信義と名誉」 triuwe und ere と「愛」 minne との対立である。(12513-26)。この対立において minne を選ぶことは、愛に対する権利、すなわちトリスタンがイゾルデを、イゾルデがトリスタンを相互に所有し合う権利を主張することである。そしてそれは彼がイゾルデを攫って逃亡することによって可能なのである。一方 ere すなわち社会に対して恥じる所のない態度を選ぶことは、トリスタンが約束に従ってイゾルデを花嫁としてマルケの手に引き渡すことであり、二人の愛は必然的に秘め隠されたものになることである。モチーフの点でいえば、これは即ち「花嫁略奪と姦通との間の選択」¹⁸⁾だったのである。

ここでの選択でトリスタンが「信義と名誉」の名において後者、即ち姦通を選んだ以上、二人の愛が露見すればそれは宮廷社会での彼らの名誉の失墜を意味し、同時に何よりも二人の愛を不可能にするであろう。さらにまた欺かれた夫マルケからすれば、密通の現行犯で捕えた恋人達なら即座に殺しても差し支えなかったのである¹⁹⁾。露見すれば恋人達を見舞うのは何れにしても破滅である。すでにブランゲーネが予見していたように。

12143 lat diz laster under uns drin
verswigen unde beliben sin.
breitet irz iht mere,
ez gat an iuwer ere;

ervert ez ieman ane uns driu,

ir sit verlorn und ich mit iu.

「この恥は我々三人の間で秘め留めておきましょう。あなた方がそれをこれ以上広めるならば、あなた方の名誉にかかわります。我々三人以外の誰かがそれを知れば、あなた方は破滅です、私も諸共に」

それ故に恋人達は策を用いてマルケの目をごまかし、愛をひた隠しにせねばならないのである。ブランゲーネの処女を犠牲にし、彼女の忠誠心をすら試さずにはいられないのである。

「ブランゲーネの誠実さは欺瞞を助けることにある」²⁰⁾と言うのは Ehrismann であるが、マルケとその一派が恋人達に仕掛ける罠と策略と監視から二人を免れさせ、秘密の露見を防ぐのは専らブランゲーネの洞察力であり、知恵と助言である。順を追って見てゆけば、

1) マルケが寝物語にイゾルデを陥れようとする策に対しては策略をもって (13746ff., 14154f.)。

2) 監視の厳しさ故に密会が出来ぬ悩みから、二人が病み衰え生命の危険が生じた時には、T と I の頭文字を刻んで小川に浮かべた木片を使者に仕立て、密会を可能にすることで (14423-37)。ここでは愛の告白の後に見られるような生命の危険に、もうひとつ危険が重なっている。つまり思いの満たされぬ悩みがあからさまに顔に出るので、そこから秘密が発覚しそうなものになるのである。因にゴットフリートがブランゲーネをこの密会方法の発明者としたのは、アイルハルトの作にも、Saga と Sir Tristrem にもないことで、彼が加えた変更である²¹⁾。

3) メロートが床の上に撒いた小麦粉に気付き、それに秘められた悪巧を見破り、トリスタンに警告を与えることで (15139-68)。

この警告にもかかわらず「恋に盲目の人トリスタン」Tristan der minnen blinde (15186) はイゾルデの寝台に跳び移り、瀉血を行ったばかりの血管が破れ両方の寝床と寝具を血で汚す。これがマルケの疑惑をまたもや深めさせ、その結果行われるのがイゾルデに対する「灼鉄の裁き」である。

これを境にブランゲーネの役目は変る。恋人達に助言を与える立場から、むしろ彼らの指示を実行する立場に変るのである。

恋人達が極めて平和的に宮廷から追放され愛の洞窟へ赴く時、ブランゲーネは宮廷に留る。その理由は二ヶ所で示されている (16631-37, 16661-78) が、これは原拠には見られないものでゴットフリートの手による挿入である²²⁾。恋人達とマルケ王との来るべき和解に備えて、その仲立ちとなるのが二人から彼女に与えられた使命である。ブランゲーネが恋人達に従って愛の洞窟へは行かず宮廷に留ることをもって、Tax は「彼女がもともと洞窟においてこの世での最高の成就に至る本来の愛の領域の住人ではない」²³⁾からだと強調するけれども、媚薬によって「特別なただ二人の恋人だけを含んだ愛の領域」²⁴⁾が実現したと述べる Tax 自身の論法からしても、これは当然のことである。媚薬の残りをブランゲーネが捨てることによって、マルケがこの愛から排除されたように、彼女自身も媚薬を飲みはしないのであるから。何よりもこの愛の当事者はトリス

タンとイゾルデなのである。

ブランゲーネが最後に登場するのは、秘密の愛が発覚し、恋人達の別離へと至る場面である。トマの作ではこの場面にブランゲーネは登場しない。出て来るのはメロートである。密会の現場にマルケを連れて来るのはメロートであり、しかもマルケが廷臣達を証人として連れてくるまでその場に留るのである。しかし二人が目覚めて露見に気付く、トリスタンの逃亡へと続くところでは、このメロートの存在が忘れられて、二人はメロートの目の前で別れ的一幕を演ずることになるのである²⁵⁾。ゴットフリートは、この不合理なメロートの存在を削除した。その代りにここで彼はブランゲーネを登場させ、Vogt に言わせれば、ここでも「忠実な Wächterin として」「特に好んで」²⁶⁾筋に関与させているのである。

トリスタンがイゾルデの待つ果樹園にやって来ると、ブランゲーネは婦人部屋に戻り、使丁達に戸口を全部閉ざして彼女が許さぬ限り誰も中へ入れぬように命ずるが、しかし彼女はこの時すでに「不安におののいて」mit angestlicher swaere (18167) いるのであり、

18174 nu bedahte si daz
und betruretez in ir muote,
daz vorhte noch huote
an ir vrouwen nicht vervie.

「心配も見張りも自分の主人には何の役にも立たないと考えて、心で悲しんでいた」のである。マルケの不意の出現の前には、彼女があらかじめ侍女や使丁達に命じておいた予防措置も無力であり、マルケは今初めて秘密を目の当りに見るのである。眠りから覚めて露見に気づいたトリスタンが、最初に口にするのはこの言葉である。

18250 waz habt ir getan,
getriuwe Brangaene!

「そなたは何ということをしたのだ、忠実なブランゲーネよ」

トリスタンは露見の責任をなおもブランゲーネに帰そうとするのである。

これが表面上、トリスタンとイゾルデの関係の終りである。

3

ブランゲーネの発案により、小川に流した木片を合図として果樹園での密会が可能になる時、Tax は「作品全体から見れば、ブランゲーネの宮廷風策略によって、ここでもトリスタンとイゾルデのすぐ目前に差し迫っている reine sene ゆえの愛の死が、当分また延期される」²⁷⁾のだと強調している。Tax によれば、「トリスタンとイゾルデの愛は、その実現のためにブランゲーネを必要とし、彼女の保護と彼女の監督のもとにある限り、ありふれた宮廷風の単なる喜びのミンネの域を出ない」²⁸⁾のである。Tax がこのように言う時、彼が何よりも重視するのは、プロローグでのゴットフリートの言葉であり、二人の愛が、不思議の小犬プティクリューのエピソードにおいて「アガペー風の特徴」²⁹⁾を帯びることであり、更には別離の場において一種神秘的なまでに内面

化・精神化されることである。

プロローグでゴットフリートは次のように述べている。

125 ich wil in wol bemaeren
von edelen senedaeren,
die reiner sene wol taten schin :

「話して聞かせよう。清い憧れを立派に示した心気高い恋人達のことを」

しかしゴットフリートが *reine sene* と言う時、この *rein* が、愛の精神性とか官能性とはあまり関係がないことに気づかされるのである。そもそもが姦通であるこの禁じられた愛は、貞潔な禁欲という意味で、あるいは一般的、倫理的な模範という意味で *rein* なのではない。イゾルデのブランゲーネ殺害の試みの後、機会さえあれば恋の追求に熱中する恋人達について、ゴットフリートはこう言っているからである。

13009 diu was an in reine unde guot.
ir beider sin, ir beider muot,
daz was allez ein und ein,
ja unde ja, nein unde nein ;
ja unde nein, nein unde ja
entriuwen daz was niender da :

「二人の愛は清く立派であった。二人の気持と心はいつも完全にひとつであり、どちらもが肯定か、どちらもが否定かであった。一方が肯定、他方が否定ということは決してなかった」それともこれは単なる言葉の遊びに過ぎないのであろうか。そうではなさそうである。例はもうひとつある。秘密の愛の発覚後、別離に際してイゾルデは、二人の間の「愛と誠」*der liebe unde der triuwe* (18303) を指して、

18305 diu lange und also lange vrist
so reine an uns gewesen ist.

「長い間、こんなにも長い間、二人の間でこんなに清らかだった」と述べるのである。それ故二人の愛について *rein* と言う時、それは *Unsinnlichkeit* を指してのものではなく、二人の人間の「完全な肉体的精神的一致」³⁰⁾を指してのことだと理解されるのである。

Tax はまた、トリスタンの両親リヴァリーンとブランシェフルールの愛を、本質的にただ肉体的な愛の合一とそれに結び付いた単なる喜びにのみ向かう低次元なものとみなし³¹⁾、トリスタンとイゾルデの愛の前奏曲としてではなく、その対立物と捉えている。彼によれば、宮廷の世界におけるトリスタンとイゾルデの愛は「魔の領域」³²⁾に属するものとみなされるのである。それ故二人の密会に協力し、マルケを欺くのに手を貸すブランゲーネは、さながら恋人達の真の救済を妨げる悪魔的な誘惑者のようにもみなされる訳である。

しかし、この伝でいけば、ヨーロッパのあらゆる恋愛・姦通物語の原型ともいべきこの「ト

リスタン」物語が、あたかも「反トリスタン物語」Antitristanroman³³⁾の如くなるのである。

Hahnによれば、「トリスタン」において重要な情況は禁じられた愛であり、この主題は「向き合う外的諸情況の中で愛の要求を貫徹すること」³⁴⁾にあるとのことである。ゴットフリートが原拠から受け継いでいる一連の欺瞞的行為のエピソードにおいて問題なのは、愛の本質を解釈することではなく、ただ、「苦しみつつ、人をも苦しめつつ自己を主張する愛の権利」³⁵⁾なのである。

Taxの言うのとは逆に、むしろトリスタンとイゾルデは彼らの愛の権利を主張するためにこそ、ブランゲーネの存在を必要とし、彼女の助言と援助がなければ、そもそも愛の権利を主張することさえ不可能なのである。

もう一度ブランゲーネの行動を大まかに振り返ってみよう。まずトリスタンとイゾルデの愛の大前提である和解を成立させるのは彼女の力である。イゾルデの復讐心と、国同志の敵対関係によってそもそも結びつく筈がない程遠く隔たっていた二人の間を、この和解によって接近させ、不注意から二人に媚薬を飲ませることによって、二人の愛を決定的なものにするのである。媚薬の残りを捨て去る行為は、二人の愛の関係にマルケという不純分子が入り込むのを排除することであり、同時に二人の宮廷社会での孤立をより明確にし深めることでもあろう。愛の告白後の恋人達にとっては、ブランゲーネの存在自体が「劇的要素」としての *huote* である。初夜における身代りというブランゲーネの犠牲がなければ、宮廷での二人の愛はそもそも不可能である。それに続くイゾルデによる殺害のもくろみは、ブランゲーネにとっての転機である。ここで彼女の無類の誠実さが確認されることになるが、この誠実さこそが、マルケの *huote* から恋人達を守り助けるというこれ以後の彼女の役目を保証するのである。しかもこのマルケの側からの *huote* を引き出すのもまたブランゲーネである。すなわち、戸締を忘れることによってである。ブランゲーネが助言者としての役目をもはや失った時、つまり彼女の警告にもかかわらず、トリスタンがイゾルデの寝台へ跳び移る時、彼らに訪れるのは「灼鉄の裁き」という危機である。そして彼女が恋人達にはもはや「心配も見張りも」無駄だとあきらめた時が、露見の時であり、恋人達の別れの時でもあるのだ。

4

ブランゲーネの行動を通して認められるのは、何よりもまず物語の筋の推進力としての役割である。王妃から託された媚薬の保管を怠り、トリスタンとイゾルデの二人がそれを飲む機会を与えて愛の発端とし、二人に肉体の合一を許すことにより不倫の愛への道を開くのである。彼女の身代りという犠牲がなければ、そもそも恋人達の愛は不可能であり、以後の物語も成り立たない。戸を締め忘れて物語に劇的な展開を与え、恋人達をマルケの監視の下に置き、二人にその監視を逃れさせるのもまたブランゲーネである。

ゴットフリートが原拠に対してブランゲーネの役割に新たに付け加えたものは、何れも物語の筋の一貫性、合理性に関するものと言えるであろう。まずブランゲーネの登場の時機を早め、トリスタンとイゾルデの和解の成立に積極的に加わらせるのが、それである。この和解こそ、それ

から後の物語とそれ以前の物語とを有機的に結び付けるものであり、これなしにはトリスタンとイゾルデの愛も全く不可能なのである。次は媚薬の残りを捨て去ることである。この物語において必要なのは、トリスタンとイゾルデの二人にマルケを対置することであり、マルケにまで媚薬の影響が及んでしまつては、この図式を徒に混乱させるばかりであろう。マルケの宮廷から追放され愛の洞窟へと赴く時、恋人達は Saga や Sir Tristrem に見られるように大喜びで宮廷を去って行くのではなく³⁶⁾、マルケに呼び戻されるや喜んで (17694ff.) 宮廷に帰って来るのであり、宮廷への復帰が最初から予定されている以上、恋人達とマルケの和解の仲介者が必要とされるのは当然であり、その際考えられるのはブランゲーネ (とクルヴェナル) だけである。そして最後に露見の場における登場である。ここではしかし、原拠におけるメロートの不合理な存在を削除すれば、それで一応筋としての不合理は消える筈であろう。メロートの存在を削除した上でのブランゲーネの登場である。

ところで、トリスタンとイゾルデの愛の発端、すなわち二人が媚薬を飲んだ時から、ブランゲーネは二人の愛が死においてしか解決を見出し得ないことを既に見抜いていたのである。媚薬の残りを捨てた時、こう言って彼女は嘆いたのである。

11705 ouwe Tristan unde Isot,
diz tranc ist iuwer beider tot!

「ああ悲しい、トリスタンさま、イゾルデさま、この飲み物はあなた方お二人の死ですよ！」
そしてまた二人に肉体の合一の機会を与える時にも、無条件にそれを許した訳ではなかった。彼女は二人に次のように言ったのである。

12140 swa ir iuch aber gemazen
und enthaben muget an dirre tat,
da enthabet iuch, daz ist min rat.

「しかし、あなた方が節制し、このような行為を慎むことができる時には、そうなさって下さい。これが私の忠告です」

これを節度 maze の勧めと理解することができるであろう。

一方また露見の場に先立つ「見張り」huote についての長い Exkurs の中で、ゴットフリートが賞讃しているのは、「節度」maze すなわち lip「本性の表現としての肉体」と ere「礼儀、道徳の表現としての名誉」³⁷⁾の間の正しい関係である (17992ff.)。この Exkurs の直後に続くのはしかし、トリスタンとイゾルデの二人の名誉の喪失、すなわち上記の maze の不可能に対する憤懣の意の表明なのである。

18126 ez was an einem mitten tage
und schein diu sunne sere,
leider uf ir ere;

「ある真昼のこと、太陽がじりじり照りつけ、残念なことに彼らの名誉を焼き焦がしたのである」

こうした後に露見と別離の場面が続くところを見れば、この場面にブランゲーネを、恋人達に

maze を勧めながらも、最初から既に二人の愛がこの世においては所詮叶わぬもので、死においてしか解決を見出し得ないと見抜いていたブランゲーネを、これまでが常にそうであったように、この二人の最後の別離の場にも立ち合わせ、それを見届けさせるのは、極めて当を得たことと思われるのである。

ゴットフリートが、ブランゲーネをしばしば重要な場面に登場させ、トリスタンとイゾルデの、延いては物語の彼女への依存度を高め、彼女にさまざまな役割を担わせたことは確かであり、それによってまた物語の筋の流れも不合理を排し、より一貫したものになったと言えるであろう。

以上のようなブランゲーネの役割、とくにマルケの宮廷におけるそれから思い起されるのは、ヴォルフラムの *Tagelied* における夜警の存在であり、夜警すなわち「不倫の愛の密会者の *Hüter* である *Wächter*」³⁸⁾の役割との類似である。

Tagelied の愛は、夜警によって守られ維持される秘密の愛であり、人目を忍んで愛する恋人達にとって、愛の幸福は夜警の存在を抜きにしては考えられないものである。ここでも露見すれば失うのは名誉と生命であり、不倫の恋人達の全存在がこの夜警にかかっているのである。「*Tagelied* の叙情的 *Pathos*」³⁹⁾は実に夜警の存在と彼によって告げ知らされる危険にかかっていたのであり、「*Tagelied* の中で夜警の機能を鮮明にし様々な役割を付与した」⁴⁰⁾のは、ヴォルフラムが最初とのことである。

ヴォルフラムが *Tagelied* の中で行ったことを、別のジャンルでゴットフリートもまた行ったと言えよう。「トリスタン」の中で、ブランゲーネという人物を通じてである。「不倫の愛の密会者の *Hüter* である *Wächter*」の存在とその役割の重要性の認識に関して、ゴットフリートとヴォルフラムは同じ立場にあったのではあるまいか。

ブランゲーネはゴットフリートの *Lieblingsgestalt* ⁴¹⁾である、と Pfeiffer が言うのも決して誇張ではない。既に見てきたように、原拠においては所々にしか登場しないブランゲーネを、ゴットフリートは媚薬のエピソードに先立つ和解、もっと正確には「龍との戦い」の場面から、恋人達の別離に到るまで、終始一貫して物語に関与させ、再三にわたって特別の注意を向けているからである。

ゴットフリートがブランゲーネを「満月」*daz volmaene*⁴²⁾に譬えているのも、それを裏付けるものであろう。なぜなら、*Mond-Bild* は、中世においては非常な美人のために用いられたからであり⁴³⁾、また Jackson によれば、愛する人に対する讃辞⁴⁴⁾でもあるからである。彼女はまたゴットフリート自身にとって、*min vrou Brangaene* (10777) でさえあるのである。

テキスト

Gottfried von Straßburg: *Tristan und Isold*. Herausgegeben von Friedrich Ranke. ¹⁴1969.
Gottfried von Straßburg: *Tristan*. Nach der Ausgabe von Reinhold Bechstein herausgegeben von Peter Ganz. 2Bde. 1978. (Deutsche Klassiker des Mittelalters, Neue Folge 4.)
Gottfried von Straßburg: *Tristan*. Nach dem Text von Friedrich Ranke neu herausge-

geben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn. 3 Bde. 1980.

(原文の引用は Ranke 版に従う。)

引用の原文に訳を付すにあたっては、石川敬三氏の訳業：ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク（石川敬三訳）「トリスタンとイゾルデ」、郁文堂、昭和51年、を参考にさせて戴いた。

注

- 1) Jackson, W. T. H.: The Role of Brangaene in Gottfried's Tristan, The Germanic Review 28, 1953, S. 290.
- 2) Ehrismann, Gustav: Geschichte der deutschen Literatur bis zum Ausgang des Mittelalters, Zweiter Teil: Die Mittelhochdeutsche Literatur, II: Blütezeit, erste Hälfte, unveränderter Nachdruck 1954, S. 304.
- 3) ゴットフリートの原拠であるトマの作は断片でしか伝わっておらず、しかもそれがゴットフリート作の中断するあたりから始まっているので、両者を直接比較できるのは僅かな分量に限られ、その他の部分は、トマ作のノルウェー語訳 Saga、英語訳 Sir Tristrem とゴットフリート作との比較に頼ることになるが、以下小論では、ブランゲーネの扱い方の相違について次の諸著作の記述をもとにしている。その都度注を付すことにする。
 - Vogt, Friedrich: Geschichte der mittelhochdeutschen Literatur, I. Teil, 1922.
 - Tax, Petrus. W.: Wort, Sinnbild, Zahl im Tristanroman. Studien zum Denken und Werten Gottfrieds von Straßburg, 1961.
 - Gottfried von Straßburg: Tristan. Nach dem Text von Friedrich Ranke neuherausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn, Band 3: Kommentar, Nachwort und Register, 1980. (以下 Krohn と略記)
 - Gottfried von Straßburg: Tristan. Nach der Ausgabe von Reinhold Bechstein herausgegeben von Peter Ganz, 1978. (Deutsche Klassiker des Mittelalters, Neue Folge Band 4.) (以下 Bechstein/Ganz と略記)
- 4) Krohn, a. a. O. s. 128. Bechstein/Ganz, a. a. O., II. s. 328.
- 5) Vogt, a. a. O. s. 331. Tax, a. a. O. s. 53.
- 6) Vogt, ebenda.
- 7) Joseph Bédier: Der Roman von Tristan und Isolde. Deutsch von Rudolf G. Binding, 1979. (insel taschenbuch 387)
ベディエ編佐藤輝夫訳「トリスタン・イゾー物語」(岩波文庫)
- 8) Tax, a. a. O. s. 68.
- 9) ebenda s. 69.
- 10) Jackson, a. a. O. s. 296.
- 11) ebenda s. 294f.
- 12) ebenda s. 290.
- 13) Bechstein/Ganz, I. s. 325.
- 14) niftel (9421, 10386, 111447, 12481, 12490) herzeniftel (10372, 12126) niftelin (12621) er was min mac (10533)
- 15) Krohn, a. a. O. s. 122.
- 16) Gottfried von Straßburg: Tristan. Text, Nacherzählung, Wort-und Begriffserklärungen von Gottfried Weber in Verbindung mit Gertrud Utzmann und Werner Hoffmann, 1967, s. 840.
- 17) Ehrismann, a. a. O. s. 317.

- 18) Ruh, Kurt: Höfische Epik des deutschen Mittelalters, II. Teil. 1980. (Grundlagen der Germanistik 25) s. 235.
- 19) Combridge, Rosemary Norah: Das Recht im 'Tristan' Gottfrieds von Straßburg, 1964. (Philologische Studien und Quellen 15.) s. 133.
- 20) Ehrismann, a. a. O. s. 317.
- 21) Krohn, a. a. O. s. 141.
- 22) ebenda s. 156.
- 23) Tax, a. a. O. s. 119.
- 24) ebenda s. 67.
- 25) Krohn, a. a. O. s. 177. Vogt, a. a. O. s. 336f.
- 26) Vogt, a. a. O. s. 337.
- 27) Tax, a. a. O. s. 92.
- 28) ebenda s. 77.
- 29) ebenda s. 116.
- 30) Endres, Rolf: Einführung in die mittelhochdeutsche Literatur, 1971. (Ullstein Buch 2811) s. 204.
- 31) Tax, a. a. O. s. 22.
- 32) ebenda s. 94.
- 33) Wehrli, Max: Besprechung von: Petrus W. Tax, Wort, Sinnbild, Zahl im Tristanroman, in: A. Wolf (Hrsg.): Gottfried von Straßburg, 1973. (Wege der Forschung Band CCCXX.) s. 357.
- 34) Hahn, Ingrid: Raum und Landschaft in Gottfrieds Tristan. Ein Beitrag zur Werkdeutung, 1963. (Medium Aevum 3.) s. 144.
- 35) ebenda
- 36) Krohn, s. 156.
- 37) ebenda s. 174.
- 38) 伊藤泰治・馬場勝弥他: ヴォルフラムの叙情詩——Tagelieder と Werbelieder——、名古屋大学総合言語センター言語文化論集 第IV巻 第2号 (1983) 162頁。
- 39) 同上 171頁。
- 40) 同上 170頁。
- 41) Pfeiffer, Ingeborg: Untersuchungen zum "Tristan" Gottfrieds von Straßburg unter besonderer Berücksichtigung der altnordischen Prosaversion, 1954. s. 41.
- 42) daz schoene volmaene (9460, 11082) daz volmaene (11509)
- 43) Krohn, a. a. O. s. 106.
- 44) Jackson, a. a. O. s. 291.
Jackson は、Nibelungenlied の第 5 歌章と Heinrich von Morungen (Minnesangsfrühling, 136, 7) の作に見られる例を挙げている。